

私はスペイン語を話すことができるため、彼女の母語であるスペイン語で説明しわかるまで教えていました。さらに、学校での友達の悩みを聞いてあげることや、自分も外国人で日本の学校を経験してきたことを踏まえた上でのアドバイスをしたりもしていました。学習のみではなく、彼女の悩みを聴く時間を毎回とりメンタル面や心のサポートも行っていました。

彼女は当初、自分が外国人だから人間関係がうまくいかない、勉強ができないと自分のルーツをマイナスにとらえてしまい自分自身のアイデンティティに自信が持てずになりました。しかし、学習支援を行っていくにつれ少しずつ変わっていききました。私の姿を見て同じペルー人の人が大学に入学することができるということが彼女の励みと希望になり、同じように大学に行きたい、勉強を頑張りたいと思うようになりました。また、彼女が学校を休む回数も減りました。

彼女は学習が抜けている部分の影響もあることからテストの点数が良くなく、学力的に高校進学は厳しい面がありましたが、学習支援での復習や彼女自身の勉強への意欲が高まったこと、努力して勉学に励んだことの甲斐があり、定時制高校に入学することができました。

中学校になじめず学校が嫌い、高校進学もあきらめていた彼女が高校に入学できたとき自分のことかのように嬉しかったことを覚えています。

3年間の学習支援を通し、学習支援の重要性や寄り添ってサポートしていくこと、ロールモデルを示すことが大切だとわかりました。

おわりに

日本語がわからないことから学校の勉強についていけなくなる外国にルーツのある子どもたちは、学校に行かなくなり、家に閉じこもってしまう場合があります。最悪の場合、不就学になってしまいます。そのような子供たちは、「自分はできない人間なのだ、外国人だから日本語ができず進学ができないのだ」と思うてしまうことや、将来に希望が持てないことや、夢を持てないことがあります。

自分に外国のルーツがあるから、言葉や文化に違いがあるからできないのだと思うのではなく、このような学習支援を利用することや努力すれば日本語もわかるようになり、学習にもついていき日本社会でもやっていける、さらに自分のルーツはマイナスにとらえるのではなく役に立つことがたくさんある、と少しでも多くの子供たちが思うようになるのが私の願いです。

半年の集中支援

大学院地域創生科学研究科1年 于 稚楓 (ウチフウ)

去年の10月から今年の2月まで、中学3年の中国人生徒A君の日本語勉強を手伝いました。最初にA君と会った時、中学校の会議室で、私は中国語で「私も日本語の勉強をしています。困ったことがあれば教えて下さい」と言いました。A君も「ありがとう、わかりました」と中国語で答えてくれました。

初めての勉強では、私たち二人は授業から離れて自習室で勉強しました。授業中に難しいことがあるかどうかを聞いたところ、中国の数学、英語などの授業内容は日本の同学年のコースよりはるかに難しいとのことでした。日本の中学校3年生の内容は中国の中学1、2年生の時とほぼ同じと言います。最も困難なことは、日本語だらけの国語と社会、そして日本語が分からないために完成させられない問題とのことでした。

A君から話を聞くと、日本に来る前には五十音の勉強だけをしていたということでした。日本に来てからの日本語の勉強については、基本的に日本に居住しているおばあちゃんが教えてくれていました。私は日本語でA君と簡単な会話をしようとしたのですが、彼はほとんど簡単な単語しか答えられず、文にはなりません。私はA君と一緒に彼の教室に入って、支援することもしました。学生に本を読ませて考えさせるコーナーの中で、先生はA君のそばに来て彼が理解できているかどうか、聞いてきました。

授業後、男子生徒たちはA君と遊んだり、追いかけてをしたり、トランプをしたりしていました。ただ、A君は日本語をほとんど話さず、クラスメートとの会話は簡単な英語で行われています。私は、簡単な会話や日本語を知っているのに、どうして日本語で話したくないのですか、と彼に聞いたことがあります。A君は発音が変なので他人に知られて直されることが恐ろしくて嫌だと答えました。これは彼のこの年齢のプライドに関わっていると思いました。

その後、私は国語の教科書の中から、日常生活でよく使われる文法を出来るだけ選んで勉強を行なうようにしました。文章を作る際にも、日常生活における文脈をできるだけ意識しました。そして、日本語の文を聞いた後、聞くだけではなく、その言葉をノートに記録し、スムーズに読まなければならないということを目指しました。日本の同級生や先生と日本語を使って交流することを、彼の目標としました。

秋休みの後、彼は休み中にクラスメートとlineでチャットしていたと教えてくれました。クラスメイトは「荒野行動」と

いうスマホゲームを招待しましたが、A君はこのゲームが上手で、いつもチームを勝利に導いていました。このことが原因でA君は男子の間で人気者になりました。そして、私を喜ばせる変化が起こりました。授業間の休みの時、彼は私に中国語で話すことが少なくなり、もっと多くの時間をクラスメートと一緒に遊ぶことに使いました。

12月中旬、受験が近づいてきました。A君が目標としている学校は公立の全日制高校です。私たちの勉強は面接の練習に多くの時間を使うようになりました。彼は面接の時に、わからないことを聞かれるのではないかと心配している様子です。例えば、「好きな映画を紹介してください」と聞かれると彼は分かるのですが、「最近見た映画の中から、好きなものを選んで紹介してください」と聞かれると、彼はなかなか理解できないのです。そこで私たちは可能性のある問題をすべて書いて、勉強しました。

2月13日A君から希望校に合格したというメッセージが届きました。私はとても嬉しかったです。彼は慣れない環境のなかで、日本語の勉強に対してずっとポジティブな気持ちを持ってきました。私はその彼に少し感動しました。

実はA君と一緒に勉強している間、面白い裏話がたくさんあります。5ヶ月同じ人と一緒に勉強するのは、なかなか難しいことだと思います。この思い出は、きっと私の人生の中で貴重な経験の1つになります。

中学3年進級時に来日した生徒の高校進学を見守って

那須塩原市立三島中学校 教頭 俵藤 秀之

宇都宮大学学生ボランティアとの交流の始まりは、「多言語による進学ガイダンス」開催についての案内からでした。9月2日に田巻先生が本校に説明に訪れた際、本校に在学中の中国籍の二人の生徒への支援についての話をしたときに、学生ボランティアの話をいただきました。早速、その話に飛びつき2名の中国人留学生の支援が実現しました。

二人の留学生は週に1日、宇都宮からわざわざ本校まで出向いてくれました。二人の丁寧なサポートは生徒にとって大変有意義なもので、彼らは毎週留学生の訪問を心待ちにするようになりました。

特に、県立の進学高校を希望していた3年生のU君にとって、留学生ウさんとの出会いはまさに奇跡の出会いでした。中学3年進級時に来日した彼は、まったく初めての日本でした。彼自身も家族のサポートを受けながら一生懸命学習に取り組み、学力も向上していきましたが、不慣れた日本語や進学についての各種手続きについての不安

はぬぐえませんでした。本校でも、学区内にある小学校の日本語指導教室へ通級できるように手配するなどの支援を行ってきましたが、受験期を控え、より効果的な支援を模索していた最中でした。ウさんの支援は彼の日本語指導だけでなく、授業に入ってから学習補助、進路選択への的確なアドバイス、そして、日本での生活に適應するための様々な助言まで非常に素晴らしいものでした。以下は、実際に支援を受けたU君と学級担任のコメントです。

◆U君(三島中卒・県立全日制高校1年)

去年の9月から、同じ中国から来た留学生のウさんが中学校に毎週1日来て、日本語を教えてくださいました。今年の2月まで毎週来てくれました。この期間、私たちは、一緒に話をしたり、笑ったりしました。私の日本語のレベルはとても向上しました。彼女のサポートのおかげで、私は希望していた高校に合格することができました。私は、ウさんにサポートしてもらったことに感謝しています。

◆学級担任から

昨年4月に来日し、初めての日本での生活、初めての日本の学校、大きな不安があったと思います。日々の学校生活、また修学旅行や体育祭などの学校行事を通して、新しいクラスメイトと楽しそうに話をする場面は徐々に増えていきました。しかし、日本語を理解するのが難しく、うまくコミュニケーションがとれない様子でした。

そんな中、9月からウさんが毎週1回来てくれたことで、U君の笑顔も増え、授業に対しても積極的になってきたと感じました。日本語を教えてくれただけでなく、母国語で話ができる安心感、授業のサポート、悩み相談など、U君の大きな支えになりました。

知らない国で勉強する外国人中学生にとって、同じ国からの留学生のサポートは大きな支えになりました。大変感謝しています。

さて、二人の留学生は、中国籍の生徒への支援のために積極的に教室に入って授業のサポートをしたり、一緒に給食を食べたりしてくれました。教室に、他国の大学生がいることに対して、初めは戸惑っていた生徒たちも次第に慣れて、知らず知らずのうちに異文化交流を体験し、自分と違う価値観や文化に触れることができたように思います。グローバル化が叫ばれる現在、このことも、本校生徒にとって大変貴重な交流になったと思います。

また、留学生ではありませんが、他にも地元の大学生に数学の授業のサポートに入ってもらいました。夢の実現を

目指し、異国で頑張る留学生や学び続ける地域の大学生と直接触れあい、交流することは非常に有意義な経験でした。彼らは生徒たちの良きモデルであり、生徒たちのキャリア観の育成にも繋がるものだと感じました。改めて、宇都宮大学のサポートに感謝申し上げます。

現在、新型コロナウイルス感染症の影響で、留学生や大学生の受入れが困難な状況であります。しかし、一度繋がった交流は今後もぜひ継続していきたいと考えています。一日も早くコロナ禍が終息し、以前のような楽しく活気のある授業を全ての学生・児童生徒が安心して受けられる日が来ることを祈りつつ、今できる最大限の教育活動に最善を尽くしていきたいと思っております。

学ボラ派遣に関する関係者の声

「知りたい」と「こたえたい」が出会う場所

宇都宮大学国際学部1年 早川 史花

私は、2015年の8月から、小山市立城東小学校の中にある、外国人児童生徒適応指導教室「かけはし」で、外国人中学生とともに勉強をするボランティアに参加しています。現在、宇都宮大学からのボランティアメンバーは9名で、土曜日の朝9時から11時半頃まで活動しています。日課は、40分間の授業を3回おこなうという構成で、勉強する教科は生徒本人が選択し、内容は定期試験、高校入試、宿題、先生(ボランティアメンバー)のお任せなど様々です。

その日の参加人数にもよりますが、基本的に一人の生徒に対して先生一人が教えます。また、生徒と先生の組み合わせは固定されていないので、生徒は先生全員と関わることができると同時に、ボランティアメンバーもすべての生徒に関わることができます。私は、授業中に生徒から伝わってくる、「わからない」、「知りたい」という気持ちと、それにこたえようというボランティアメンバーが醸し出す雰囲気大好きです。

私が、このボランティアに参加することになった経緯を説明します。大学に入学して数カ月経ち、「ボランティアに参加してみたい」と考えていた私は、いつも学内の掲示物に目を光らせていました。するとある日、掲示物の中に母校の小山城東小学校の文字を見つけたのです。私はすぐに、「参加してみたい」という気持ちになりました。ポスターに書いてあった、活動内容の説明の中の、「外国人生徒」という言葉から、私は思い出したことがありました。

小山市で育った私の小中学生時代は、同級生にいつも外国人がいました。かれらの中には、学校での生活は大変だっ

たろうな、と思いつける人が何人もいました。なぜなら、「違う」ということを敏感に意識する時期に、外国人生徒たちに向けた、私たち日本人のまなざしや言動は、容赦のないものだったと思うからです。そんなかれらの事を思い出すほどに、申し訳ない気持ちを感じるとともに、この活動の重要性を強く感じました。私は、ポスターを発見したその足で、担当の若林先生の研究室を訪ね、お話を聞き、その場でボランティアに申し込んだのです。

毎回の活動を通して、生徒と一対一で勉強することにより、一人一人がどんな生徒なのかを知ることが出来ます。同時に、質問に分かりやすく答えられない自分を情けなく思いつつも、その時に一番良いと考えた方法で、生徒たちと勉強してきます。その日のボランティアが終わったあとは、来週のために、生徒にとってさらに良い教え方を考えます。しかし、何が正解か分からないのも現実です。

これまで、約半年の経験の中で、私は、外国人生徒と勉強するときに大切だと感じることを見つけました。まず、「生徒が何を分かっている、何を分かっているか把握すること」。次に、「漢字の読み方や言葉の意味を丁寧に説明すること」。そして、「どうしたら生徒がもっと勉強をする気になるかを考えること」の三つです。これらは、生徒が知りたいことを勘違いしたまま授業を進め、しばらくしてその勘違いに気づき、授業の時間を無駄にしてしまったという失敗や、言葉の意味が分からなければ問題も理解できないという当たり前の事実、そして、生徒の学力は最終的には生徒自身の努力次第であることに気づいたことから得られました。これからは、さらに多くのことを学び自分の能力を高め、少しでも生徒の役に立てよう努力したいと考えています。

この活動は、一人でも多くの外国人の子どもが、高校に進学することが出来ることを願っておこなわれています。学歴が重視されるこの社会で生きていくために、高校に進学することはとても重要です。このボランティアを必要とする一人でも多くの生徒たちが、この教室に来てくれることを願っています。また、同時に、先生となるボランティアメンバーが増えることも願っています。

●HANDSnext vol.21 (2016年2月15日)

学生ボランティアを受け入れて

宇都宮市立東小学校教務主任 村岡 裕之

黄佳蓓さんには、4年生の男児の支援をしていただいています。男児は、4月に来日するまで日本語や日本の生活習慣等に触れたことが全くなく、学校生活の上でさまざまな支障をきたしていました。

黄さんは、朝の会から教室に行きます。椅子は男児の席の隣にあります。教室では、担任の言葉をわかりやすく伝えたり、発表を促したり、考えるヒントを出したりするなどの支援をしています。休み時間も子どもたちと一緒に過ごし、遊びのルールなどを教えています。給食の時間も男児のグループに入り、会話の橋渡しをしたり、食事のマナーを教えたりしています。

黄さんの支援を受ける前は、男児は日本語ができないために学習面で十分に力を発揮できなかったり、時折意欲を失ったりするようなことがありました。また、友達とのコミュニケーションがうまくとれず、トラブルになったこともありました。

支援を受けるようになってからは、学習面での意欲も見られるようになり、友達との関係も良好になっています。何よりも男児の気持ちに寄り添い、よくできた時は共に喜び、悪いことをした時には厳しく叱る姿勢がとても素晴らしいです。学校としても黄さんに来ていただけて本当に感謝しています。

●HANDSnext vol.3 (2010年11月25日)

学生ボランティアを受け入れて

佐野市立城東中学校日本語教室担当 野村 智子

本校は、外国人児童生徒教育拠点校に指定されています。現在、6ヶ国12名の外国籍生徒が在籍しています。その生徒の多くは、学力面で悩みを抱え、支援を必要としています。

そのような中、宇都宮大学HANDS プロジェクトの事業の一環として、学生ボランティアを派遣しているという情報を得ました。早速依頼しましたところ、戸部さんが毎週金曜日の午後に来てくれることになりました。対応がとても早く、また、学校の事情をよく理解して、適切な学生さんを派遣していただきました。

戸部さんには、Aさんの数学の学習を見ていただいています。Aさんは、現在までのところ学習への意欲があまり認められない生徒です。戸部さんも頭を抱えているようですが、何かと工夫を凝らして、指導に当たっていただいています。しかし、その努力も徒労に終わってしまうこともあるようです。

「今日は話だけで終わってしまいました」とか、「数学はやりたくないと言われてしまいました」とか、戸部さんが話してくれますが、戸部さんを悩ませている様子です。

そんなAさんですが、毎週金曜日の戸部さんの来校をととても楽しみにしているようです。熱意を持って接して下さる戸部さんにはとても感謝しています。これからも学生ボランティアを大いに活用し、生徒の学習意欲の向上の

ために一助となつていただくようお願いするつもりです。

●HANDSnext vol.4 (2011年3月4日)

学生ボランティアを受け入れて

益子町立益子中学校 那花 幸子

昨年の夏休み、急に中国籍の男子生徒を受け入れることになりました。転入前の中学校には外国籍の生徒のための教室があり、週に数時間、そこで勉強をしていたそうです。しかし、本校ではそういった教室はなく、普通学級で対応できるかどうか心配でした。

本人の明るく社交的な性格もあり、ことばの壁はあるものの、周囲の生徒とは打ち解けて生活できるようになりましたが、数学・英語以外の授業は解らないということでした。

何か支援の方法はないかと悩んでいたところ、宇都宮大学HANDSプロジェクトの案内が目にとまり、学生ボランティア派遣をお願いしました。交通手段等の問題がありましたが、大学側で配慮をしてくださり、大城さんが週に2時間、個別に指導をしてくれることになりました。

大城さんには、1時間はテキストを使って日本語の学習を、もう1時間は授業で解らないところの解説(社会)をお願いしました。中国語が堪能な大城さんに男子生徒もすぐに打ち解け、安心して学習に臨めたようです。やさしく丁寧に指導してくださり、日本語のテキストは3か月くらいでマスターできました。男子生徒は、県立高校への進学を希望しており、来日したのが小学6年の12月のため、特例措置の入試を受けることができません。今後も学生ボランティアの方の力をお借りして、学習意欲の高い本人へのできる限りの学習支援をしたいと思っております。

●HANDSnext vol.5 (2011年6月24日)

学生ボランティアを受け入れて

栃木市立南小学校 教務主任 川俣 真理子

本校には現在、ペルー、バングラデシュ、韓国等11名の外国人児童が在籍しています。国際学部の海野さんにはこの事業が始まった昨年10月から、教育学部の戸井田さんには昨年12月から週1回程度、本校に来ていただいています。

海野さんは、6名の外国人児童が在籍する5年生の2クラスへ交代で入ってもらい、昼休みの共遊や5校時の学習支援、放課後の個別支援学習をお願いしています。明るく元気いっぱい、若さあふれる海野さんに友達とのトラブルや悩みなどを相談する児童もいて、心の面でもサポートしていただいています。

戸井田さんには、3年生のA児(ペルー国籍)のいるクラ